奥村岳志氏の「1848年革命と階級闘争論」について

2018.05.20　南雲

個々の点について言いたいことは少なくないが、それらは極力省いて、奥村論文の骨子を検討する。

1）　第1章・第2章について

『共産党宣言』は、「〈二大階級への分裂→階級対立の激化→階級決戦から革命へ〉（以下、〈二極化→革命〉という見通し・歴史観・革命論を単純明快に指し示した」（P.8）。

奥村氏はこのよう述べ（上のシェーマの媒介項として恐慌論があると思うが）、次のように結論づけている。すなわち、マルクスの理論的発展は上のシェーマを克服したが、エンゲルスは終生このシェーマを保持した。第二インター以降の「マルクス主義」は、実は“エンゲルス主義”であった、と。また、上のシェーマとマルクスの理論的発展の関連という問題は、「修正主義主義論争という形で顕在化した」（P.10）とも言う。

修正主義論争は、党内に支配的な「破局論」を批判するに際し、ベルンシュタインが「『共産党宣言』の論述をよりどころにしている」と主張したことに端を発した。しかしながら、ベーベルらの主観はともかく、エルフルト綱領は『資本論』第1巻、A7,K24,∮7「資本制的蓄積の歴史的傾向」に依拠しているとカウツキーが繰り返したことによって、「資本制的蓄積の歴史的傾向」の解釈が争点の一つとなった経緯がある。

奥村氏が抽出した問題は、『共産党宣言』の革命論との関連を含め、「資本制的蓄積の歴史的傾向」をどう理解するかという問題に集約できるのではなかろうか。この問題は、ある意味「決着を見てはいない」。

2）　第3章について

第1節において奥村氏は、「資本主義社会における階級対立の真相・本質」を三点あげている。すなわち、①「資本主義的生産関係の基本的性格」＝「資本・賃労働関係＝搾取関係」、②「資本主義的生産関係の本質的矛盾」＝「疎外された労働」、③「資本主義的生産関係の特異性」＝「物象と物象の対立」、である。そして、「マルクス主義」（“エンゲルス主義”）には①の観点しかない、と奥村氏は主張している。

ところで奥村氏は、「資本・賃労働関係」を、「資本主義的生産関係の要」（P.21）、資本主義的生産関係の「本質」（P.22）とも述べている。「基本的性格」「要」「本質」は入れ換え可能な概念なのだろうか？

第2節は、ヘーゲル的な印象を受けた。つまり、ヘーゲルの「精神」を「労働」に置き換えた哲学に思える。

先に進もう、第3節が奥村論文の“キモ”なのだから。

第二節末尾で奥村氏は、次のように階級闘争を定義している。

「労働こそ社会システムを産出する本源的な行為であり、労働する諸個人がその主体であるからこそ、人間と人間の対立においても、人間と自然の対立においても、その矛盾を解決するのは労働する諸個人であり、労働をめぐるあり方であり、階級闘争とはその解決の過程の悪戦苦闘である」。

その上で奥村氏は、「階級闘争の契機」を二つあげている。

①「『私的なものとしての社会的なもの』の矛盾が『社会的なもの』を不断に露出し、『社会的なもの』としての対立性の自覚が、階級闘争の契機となる」。

② 「人間と自然の物質代謝の危機＝生存・生命・自然の危機が、人間という側面からも、自然という側面からも、もはや持続可能性の危機を突き付けており、そのことが人間に対して、物象的連関の限界を自覚させ、階級闘争の契機となっている」。

普通、ここの労働者反抗は、生活ができないということへの反応である。それは、いわば本能のようなものであって、奥村氏の「自覚」とは対極にある。そして、上記のような「自覚」が得られれば、反抗は階級的普遍性をもつ=階級闘争になる、と一般的には言えるであろう。

しかし、我々が考えるべきは、どのようにしたらそのような「自覚」が生まれるのかということではなかろうか？　上の②は、「自覚」が自生的（自然発生的）にもたらされるというようにも読める。仮にそうだとしたら、それは経済主義を正当化する理論になると思う。例えどんな理屈をつけても、例えどんなに体系的であっても。

なお、エンゲルスの評価については、いくつかの留保つきで同意する。ただ、そのことをもって「マルクス主義」という用語を排斥するのはいかがなものか。